



チョコレート



ジン太

その池は学校の裏にあって、ヒマそうなおじいちゃんが釣りをしていたり、野球部がそのまわりを走ったりしていた。先生たちからは、あぶないから近づくなと言われていたけれど、ぼくは、その池のそばにすわって、ぼんやりするのが好きだった。デブだし、もし落ちてもぶかぶか浮くと思う。水泳はけっこう得意なんだ。

4月のなかば、校外写生大会があった。

ぼくは一人で池に行き描いた。写生大会が終わってから、教室の壁に絵が張り出されたとき、同じ池を描いた人がクラスにいたことを知った。それが平山くんだった。平山くんは金賞で、ぼくはなにももらえなかった。ちょっとくやしかった。

授業が終わって帰る準備をしているとき、「ねえ」と声をかけられた。振り返ると、平山くんだった。「翔平くん、どこで絵を描いていたの？」

話しかけると思われてなかったの、ぼくはしばらく返事ができなかった。こんなんでも、デブだからにぶいとか、神経がおそいとか言われる。ずっとかかかって、「いけ」とだけ言った。平山くんは、その間ぼくの顔をじっと見ていた。

「ぼくも描いてたんだ」平山くんがにこにこしながら言った。

「ぼく、気がつかないよ」

「上から描いてたんだ」

「上？」

じゃあ一緒に行こう、と、平山くんと一緒に池に行った。

ここだよ、と平山くんが指したところは、池のほとりにある大きな木だった。平山くんは、何も言わずにいきなりするすると木に登った。ぼくはデブなので、登らないで下から眺めてた。木の上から、平山君が顔を出す。ぼくからみたら、気がおかしいとしか思えない高さだ。

「ずっと見てたよ。ぼく、ここ好きなんだ」

それから、平山くんと友達になった。

ぼくは、友達がいないうだった。デブだし、どんくさいし、ゲームも持っていない。家に帰って、マンガを読んだり、絵を描いてるほうが好きだった。

平山くんは、よくぼくを家に誘ってくれて、手作りのお菓子を出してくれた。

平山くんはパテシエになるのが夢らしい。お菓子はいつもふわふわで、すっごく甘くておいしかった。

「こんなのばかり食べてると、また太っちゃうよ。」と僕が言うと、
「食べ過ぎなきゃ大丈夫だよ。それに翔平くん、そんなに太ってないよ。うちのお母さんが言ってたけど、子供のうちはヨコに伸びてから、タテに伸びるんだって。そのうち、翔平くんもぐんぐん大きくなるよ。」

「そうなの？」

ぼくはにこにこしながら、2個目のマドレーヌをほうばった。

平山くんは、ぼくが自分のことを、「ぼく、デブだから」とか「どんくさいから」とか言うと、いつも怒った。「翔平くんはデブじゃないし、どんくさいわけじゃない。」って。自分のために怒ってくれる人がいるなんて、ぼくにはいままでいなかった。これが親友なんだなと思うと、平山くんとずっと一緒にいたいなと思った。

机の引き出しの小さい箱には、平山くんとぼくのもの、絵の切れ端や、拾った石や松ぼっくり、お菓子の袋のリボンなんかをぜんぶ入れてある。この箱が、だんだんいっぱいになるのが楽しかった。

ぼくはこの箱を、死ぬまで持っているつもりだ。

ぼくは100歳まで生きられるかもしれない。

学校でも、休み時間でもほとんど二人でいるので、クラスの男子からは、「おまえらホモだろー？」とよく言われた。それを言い出したのは、スポーツもできてクラスのリーダーの藤堂くんだ。

男同士で遊んでるんだったら、おまえたちもだろ、ってぼくは思った。平山くんにそう言うと、「気にしないでいいよ。」とだけ言って黙った。だから、ぼくも気にしないことにした。

2月、バレンタインデーが近づいてくると、クラスの男子は、チョコもらえないかなーとか言うし、女子も誰にあげようと話をし始めた。藤堂くんが、「翔平は平山にもらうんだろ」とか言ってからかった。ぼくたち無視した。

帰り道、平山くんが、「チョコ、欲しい？」って聞いてきた。

うーん、とぼくは考えた。そんなぼくに、「誰かからもらうの？」と平山くんが聞いた。

「ううん、でも、もらいたい人はいる」

「誰？」

「平山くんにはいうけど、内緒だよ」

そう言ってぼくは、学級委員の松永さんが気になっていること。その子にもらえたら、うれしくて死んじゃうかもしれないことなんかを話した。

「ふうん……」平山くんは、なぜか興味なさそうだった。「でもどうせ、お母さんからしかもらわないでしょ」

ぼくはちょっとむっとした。その時は何も言い返さなかったけど、帰ってから、おフロに入っても、ご飯たべても、布団に入ってもまだむかむかしていたので、今度言われたら言い返そうときめた。

そして、バレンタインデーの日、当然だけど、下駄箱にも机の中にも、チョコは入ってなかった。クラスの女子の何人かは、義理チョコだよって言って、みんなに配ってたけど、ぼくや平山くんにはくれなかった。けっきょく、誰からも、一個ももらわなかった。松永さんは、誰にチョコをあげたんだろう。ぼくは気になった。藤堂くんかな。だったら、むかつく。

平山くんとの帰り道は、池によりみちした。

平山くんが木に登った。ぼくも、一番下の枝までは登れるようになっていた。

「実をいうと」頭の上から平山くんが言った。「ここから、ずっと翔平くんを見てたんだ。」

「なんの話？」ぼくが聞き返すと、平山くんは「昔のはなし。」とだけ言った。

木からおりると、平山くんは、「ちょっとまって。」と言って、ランドセルから赤い袋を差し出した。

「はい。」

平山くんは、いつもぼくに、ひろった変な石とか、作ったケーキをもうひとつ渡すときみたいに、自然に袋を差し出した。でもぼくは、それが嫌で嫌でしょうがなかった。中身は言われなくてもわかる。チョコレートだ。手作りの。

「……ごめん、いらないよ。ホモじゃないんだ」

ぼくは、袋を突き返した。平山くんの顔を見たくなくて、そのままランドセルをつかんで帰った。

ばしゃん。

池になにか落ちた音がした。

反射的にふりむくと、池の中にチョコレートが投げ込まれていた。

平山くんの顔を見た。そしてはっとした。平山くんは、真っ赤な顔をして、体中をぎゅっと固めていた。

「翔平のばか！ でぶ！ しね！」

そう言って、ぼくを追い抜いて走って行ってしまった。

ぼくはすごくショックで、家に帰ってすぐ、机の中の秘密の箱を捨ててしまった。

朝起きても、まだゆううつな気分だった。

すごく悲しい夢を見たけど、どんな夢なのか思い出せなかった気分だった。学校に行きたくない。お母さんが起こしにくるまでベットで寝ていて、頭がいたいと言うと、学校をお休みしてもいいことになった。

ゴミ箱をのぞくと、からっぽだった。ゴミを捨てるのはお父さんの仕事で、朝早く会社に出る前に捨てたんだと思う。

そのまま、昼まえまで寝た。起きると、お母さんも仕事に行っていて、家にだれもいなかった。テーブルの上にチョコがおいてあった。お母さんからだ。バレンタイン用のチョコの詰め合わせだ。たぶんスーパーで買ったんだ。

ひとつ食べた。あんまりおいしくない。

もうひとつ食べようとして、やめた。口の中がしょっぱくなっていた。平山くんのチョコのほうが、ずっとずっと甘かったんだ。